

◇◇◇ シリーズ 「会員のつぶやき」 ◇◇◇

研究室建築譚

東京大学

五月女 格

私はこの数年、予算0円で研究室を運営する方法について考えてきました。研究室運営の正攻法は、競争的資金を獲得して、研究環境や設備を整備していくことでしょうか、その名が示す通り競争的な資金は、なかなかこちらの思惑通りには獲得できないものです。私は2018年に国立研究開発法人から東京大学に移籍しましたが、その時の経験などをとおして、冒頭に述べたようなことに関心を持つようになりました。今の研究室に着任した際、前任の先生が残された高額な機器類もありましたが、専門分野の違いから私には使用方法も用途も分からないものばかりでした。そのような状況で、しばらくの間は、自分はここで何ができるのか？何をすべきなのか？と、逡巡する日々を送っていました。そのような中、偶然テレビで視聴した、下関市にある豊田ホテルの里ミュージアム学芸員の川野敬介氏の活動が目にとまりました。川野氏はミュージアムのオープン時に着任し、職員は一人で、所蔵物が全くなく、来館者からは、見るものがないのに入場料を取るのをおかしいと言われる始末だったそうです。他の博物館から展示品を借りてきて特別展を企画しても、終了すれば展示品は返却しなければならないので、ミュージアムには何も残りません。そこで川野氏は、身近な生き物などを題材に特別展を企画し、展示品はすべて、自ら収集・手作りし、特別展が終わったら、製作した展示物を常設展に移していきました。こうす

ることによって、特別展を開催するたびに、常設展示物が増えていき、ミュージアムは充実していったそうです。私はこの話に感化され、学生の卒業研究のテーマを毎年一つずつ立ち上げ、そこで使用する器具や装置を、研究室にあるものを活用しながら自作していこうと思い立ちました。これまで、粉碎機、造粒機、3Dフードプリンターなどを毎年1点ずつ作製・改造して、研究室のテーマに育てようとしてきました。まだ、完全に0円でこれらを実現するところまでは到達していませんが、極力、予算を使わずに済ませるにはと考える癖が、いつの間にかついていました。ところが、この癖が大きな威力を発揮する出来事がありました。私が所属する農学生命科学研究科でも、昨年度より研究室床面積に応じて使用料を徴収するスペースチャージが導入されました。運営費交付金と外部資金を合わせても、とても払える金額ではなかったので、実験室を研究科に返還して、面積を縮小しながら研究室を運営しています。とはいっても、今まで使用していたスペースを簡単に縮小できるものでもありません。その打開策として、アングル材などを利用して、研究室空間の3D活用を進め、使用できるスペースを増やしています。これも、スペースチャージ単価が増額されれば元の木阿弥ですが、予算0でも生き残る方法を模索しつつ、外部資金獲得に向けた申請書も書かねばと、気持ちを奮い立たせる毎日を送っております。

五月女 格 (Itaru SOTOME)

2003年 日本学術振興会海外特別研究員

2005年 (独) 食品総合研究所特別研究員

2008年 (独) 農業・食品産業技術総合研究機構任期付研究員

2011年 (独) 農業・食品産業技術総合研究機構主任研究員

2016年 (国研) 農業・食品産業技術総合研究機構上級研究員

2018年 東京大学大学院農学生命科学研究科准教授

E-mail: itarus@g.ecc.u-tokyo.ac.jp